第2回　コーランゼミ（11−33章）

2019/11/17　大谷美緒

全体を読んだ。全体の印象はあるけれど、はじめの方の11章フードと終わりの方32章の跪拝を読み込んでみる。

■11章　フード
1−2　アッラーという人はなにも間違えなく知っている。（こう言われると、他の何かを拝むというのはおかしいというかあんまりよくはないという気がする。）

5−9　人の胸のうちから、動物の行動も知っている。更に天を作ったのもこの人。

10−14　信じられないからといって魔術呼ばわりしたりするのはよくない。信じないでいるとそのうち天罰の網にからめとられる。しんどい時も、幸福なときもある程度耐えるのが大事。ただしい人たちは辛苦にたえる。そういったことができる。

15―17　マホメットはただの警告者。天使でも神でもない。奇跡がみせられないでも心配することはない。啓示はマホメットのでっちあげだっていうかもしれないけど、それなら自分でそれを作ってみればいい。できない。他の神に頼んだってできはしない。それで、これが啓示だとわかるだろう。（マホメットをいたわる感じ）

18−20　信仰しない人は、現世ではいい目にあうかもしれない。でも来世では地獄の憂き目にあう。こうなることはほんとであるからマホメットはしんぱいしなくていい。ただ、多くのものは信じてはいないけれど、でもこれは真実だ。

21−26　アッラーの邪魔をするのものは特に悪い。そういう人たちを見届け罰するものアッラーがやること。信仰を守る人とこういう人はまったく違う。来世における扱いが違う。

27−51　ヌーフ（ノア）。一族を説得しようとするも大嘘つき呼ばわりされる。信仰のあるひとは大雨から救われ、信仰のない人は大雨にのまれる。これはマホメットが今まで、神に知らされるまでしらなかった話。

52―63　フード（神から遣わされた使徒）。自らの民族をアッラーを信仰するようにすすめるが、きちがいあつかいされる。信仰ある人は救われ、そうでない人は滅ばされた。

64―71　サーリフ（使徒）。自らの民族をアッラーを信仰するようにすすめるが、あやしいと言われる。信仰しないものがアッラーの牝駱駝の健を切ったことで天罰が下る。信仰した人は救われた。

72―84　イブラーヒームとルート。アッラーの使いに最初はいぶかしむが、のちに信じる。改悛できることを褒める。ルートはソドムに来た使徒を守ろうとしたから（？）救われる。

85―98　シュアイブ（使徒）。目方をちゃんとはかるように注意しつつ、アッラーにつかえるよう、一族の者に話す。石でころしてやろうかと言われる。信仰ある人は救われ、悪人はつぶれ倒された。

※以上の話の特徴として、長老など一族の者に以前の信仰（偶像）を捨てろというのかと反抗される。

99―101　ムーサー（モーセ）。ムーサーの言っていることを聞かずに、フィルアウン（パロ）の言っていることを長老が聞いた。フィルアウンは人々を地獄へ連れて行く。

102―113　ノアの話からのまとめ。必ず悪事にふけっていると天罰がくだる。アッラーは思い立ったことは必ずやる。信仰する人は楽園へいける。偶像を崇拝するひとのことはアッラーに任せておけばいいとマホメットを安心させる。

116　礼拝を行う時間。

117　ご褒美には時間がかかることもある。辛抱強く待たないといけない。

118−120　神は正当な理由をもって裁いている。

121−123　使徒の話をしたのはマホメットを勇気づけるため。アッラーはすべての行いを見ている。心配することはない。

■32　跪拝
1−2　これはマホメットのでっち上げではなく、本当に神からのお告げ。（随分疑われていたことがわかる）。

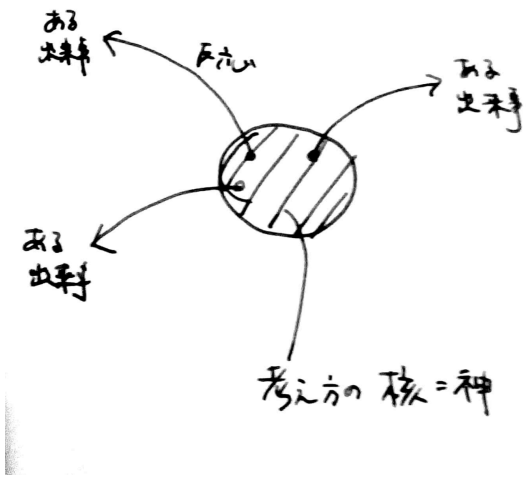
3−8　アッラーは天と地、その他一切のものを作った。（他の記述を読んでも思ったけれど、アッラーが全てを作ったということが、神であることの、全知全能の根拠としてあるのか、と思った。）

15−19　信仰する人へのご褒美について。「立派な信者ともあろうものが、罪深い人間と一緒にされてなるものか」。（民族的な選民思想はないけれど、信仰するものとしての選民というか、人間としての質の違いを見ているようには思う。）

26―27　今まで滅ばされた国々の残骸をみて、学べ、神がいることを。

28−30　最後の勝利はいつ来るかわからないけど、待っておれ。（今ではないいつかわからない勝利を待つという、結構忍耐がいることを神は要求する。これを実行するには、すごく考えてそういうふうにする、または、そういうものだと思いこむというどちらかの態度でないとできないのではないか。）

■コーランというもののイメージ



話し言葉ということが根本にあるのか、物語的まとまりがなく読みにくい。
なので（こういう風にコーランにも書いてあるのだけど）ある考え方の核みたいなものがあって、状況に応じてその核からなにか言葉が出てきているという風に考えると少しはよみやすくなった。
こういうふうに考えると、核になにがあるのか考えようとできる。例えば、信じる人にはよいことが起こしたいとか（巡礼74−最後）。マホメットを安心させたいとか。

■イスラム教への迫害
「大抵の人間は信仰心をもたぬもの」という記述が多い。キリスト教でもそうだったけど、随分迫害にあった様子（旧約から読んできてひどい迫害がなかったのはユダヤ教だけ）。信仰する人へのよいことよりも、いかに信仰しないことで悪いことが起こるかという話が多いのはそういった背景があるのか（悪く行ってくる人には言い返さざるを得ない）。

迫害から少し話がそれるけど、迫害されるほどにコーランには斬新な面があったんだと思う。一神教であることもそうだし、慣例を変えていくところもある例えば女の赤ん坊を以前は殺していたけれど殺さないようにするというコーランの話は、現代的に考えるとよりよい。その時代の一部のひとには切実に必要な変化をもたらしつつ、革新的なところがあったんだろうと思う。

■宗教とはなにかと思うくらいに仏教などとは違う
旧約聖書から読んできて宗教とはなにかということのイメージが崩れてきた。

今更、だけどwikipediaを引く。
「宗教（しゅうきょう、英: religion）とは、一般に、人間の力や自然の力を超えた存在を中心とする観念であり[1]、また、その観念体系にもとづく教義、儀礼、施設、組織などをそなえた社会集団のことである[2][3]。」

こういうふうに言われると、仏教や神道もユダヤ教も、キリスト教も、イスラム教もこれに入るんだろうとは思うので、今までは宗教を狭く見てた。一つ今回思ったのは、仏教は考え続けることが必要、自分で悟ろうとするということが重要だと思われるけれど、イスラム教などの一神教ではそれはちょっとない。ただ考えるということはないわけではなく、多分もうわたしが「〇〇教」であると言える時点で、その世界を実現しようとするという風に結論し、選択するために思考をへなければいけないのではないかと思う。まあちょっと違うかもしれない、けど、ただ一神教というと全知全能の神の思し召し通りに行動し、あまり個人としては考えないというイメージがあったけど、単純にそういうことでもないのかもと今回思った。

■信仰はしないけれど、罵倒もしないという人に対しては
コーラン内では、あえて罵倒する人に対しては天罰が下っている。特に、信仰をもたないがとくに罵倒もしないという人はどうなるのだろうか。罰までくだるのか？信仰しない人に罰は下っているようなのでそうだろうとは思う、現代的にはどう解釈されるのか気になる。

■わたしを創造した人である主と偶像
わたしを創造したという意味ですでにわたしの根拠になっている人が主。偶像はわたしとはそもそもから関係なく存在している。地球を、世界を、わたしを作ったということが万能の根拠。
偶像については、これは死んだ神を拝むということなのか。祈りの一種、願掛けとかは多分ダメ。偶像は答えない。生ける神、本当に実行力のある人に頼むことが大事。

以下はちょっとびっくり。そこは信じるのか。別の個所ではもうちょっと確固としてない書き方の場所もあった。

蜘蛛61
あの人々（信仰に入ってこない人々）にきいて見るがよい、「天と地を創造し、太陽と月を押さえつけて（人間に）役立つようにして下さったのは誰だ」と。きっと彼らとて「アッラーだ」と答えるにきまっている。

■アッラー（マホメット？）の苦悩
部族同盟73
もともとアッラーは実に気のやさいい、情けぶかいお方なのだが。
「だが」に苦悩を感じる。本当はただやさしくしていたい。

■比喩
水一楽園、火一地獄
商売「〇〇してなんぼ。」「なんぼのもんじゃい。」